松原市文化財報告　第12冊

堀遺跡

松原市天美南５丁目地内における
共同住宅建設工事に伴う堀遺跡Ｃ４－１－23発掘調査報告書

令和４(2022)年５月

松原市教育委員会

例　言

1．本書は、松原市教育委員会が事業者である株式会社アール・イー・エムより依頼を受け、令和３年度（2021）に実施した堀遺跡の発掘調査報告書である。松原市教育委員会における調査地区番号の呼称は、C4－1－23 である。

2．本調査は、共同住宅建設工事に伴って実施した。なお、発掘調査・整理作業にかかる費用は事業者が負担した。

3．現地調査・整理作業は、樫木規秀（松原市教育委員会）が担当し、佐々木正治・宮田慈（(株)アート）が補佐した。

4．本書の編集は樫木が担当し、1～3・7を樫木、4を佐々木、5を宮田が執筆し、6は樫木と佐々木が共同で執筆した。

5．本書で用いた平面座標値は、全て世界測地系（2011 成果）による平面直角座標系第Ⅵ系の数値で、m単位で表記した。また、方位は座標北を使用した。なお、水準は東京湾平均海面高（T.P.）を基準とした（例：H=10.00 m）。

6．発掘した遺構は、検出順にアラビア数字で通し番号を付し、その後ろに遺構の種類を文字で付して、遺構台帳を作成した（例：S001 溝）。また、複数の遺構の組み合わせからなる遺構については、別途通し番号をつけ、遺構の種類名を番号の後ろに文字で示した（例：1 掘立柱建物）。なお、本書の掲載にあたっては、紙幅の都合上「S」記号・3桁目の「0」を省略した（例：01 溝）。

7．地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新 標準土色帖 2016 年版』（農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色票監修）を用いて目視により比定した。

8．出土遺物実測図の断面は、土師器を白抜き、黒色土器の断面を灰色で塗り表現した。また、実測図の縮尺は1／4を基本とした。なお、出土遺物写真の縮尺は任意である。

9．表紙の画像は、国土地理院が作成した「基盤地図情報数値標高モデル（5ｍメッシュ）」のデータをもとに QGIS で作成した。

10. 調査の実施にあたり、事業者及び関係者の皆様にご協力を得た。また、整理作業については、笹栗拓氏、原田昌浩氏にご教示を賜った。記して謝意を表したい。

11. 本書の作成にあたり、下記の文献を参考とした。

大阪府教育委員会 1983『大和川今池遺跡発掘調査概要』

大阪府教育委員会 2010『堀遺跡』

大阪府教育委員会 2011『高木遺跡』

大阪府立狭山池博物館 2010『古代西除川沿いの集落景観』

(財)大阪府文化財調査研究センター 2000『大和川今池遺跡（その１・その２』

(財)大阪府文化財センター 2003『大和川今池遺跡（その５・その６・その７）』

(財)大阪府文化財センター 2009『大和川今池遺跡』Ⅰ

(財)大阪府文化財センター 2009『大和川今池遺跡』Ⅱ

松原市史編さん委員会 1985『松原市史』第1巻本文編1松原市役所

12. 本調査に関わる出土遺物及び図面・写真などの記録類は松原市教育委員会が保管している。

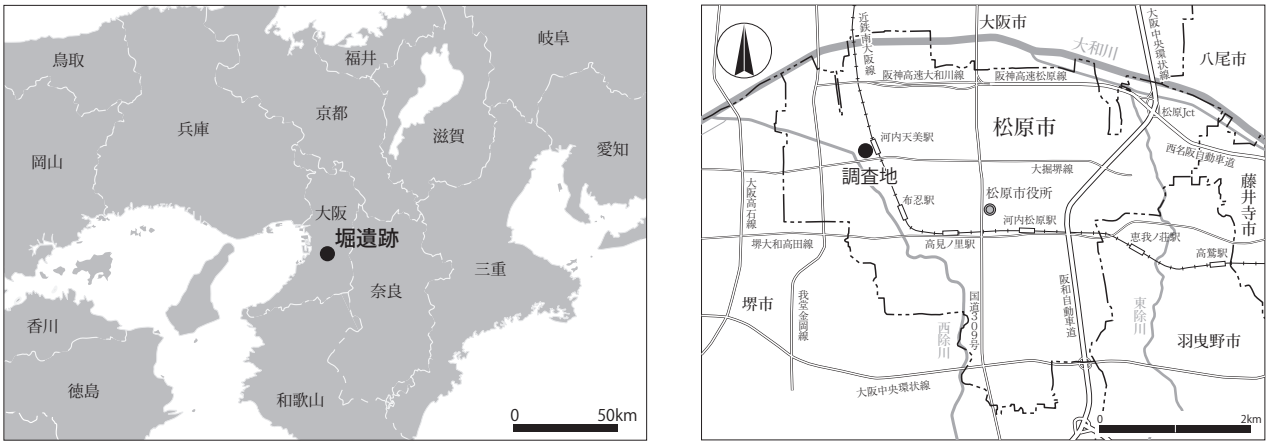


図１　発掘調査位置図

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、事業者である株式会社アール・イー・エムにより、松原市天美南５丁目 153 番６において共同住宅建設工事が計画されたことによる。

事業者より令和３年（2021）５月７日付けで、発掘届を受理し、令和３年５月 26 日に、共同住宅建設部分を対象に確認調査を実施したところ、一部において古代の遺構・遺物が認められた。

松原市教育委員会は事業者と確認された埋蔵文化財について協議を行い、埋蔵文化財が損壊を受ける範囲（204 ㎡）の記録保存調査を実施することとなった。本市教育委員会と事業者との間で、令和３年６月 20 日付けで埋蔵文化財保存に関する協定を締結し、令和３年７月７日付けで発掘調査の実施に関する覚書を取り交わし、本発掘調査に着手した。

調査区は排土置き場の関係上、南側をａ区、北側をｂ区に分割し、反転調査を行った。令和３年７月９日よりａ区に着手し、その後ｂ区に着手した。各調査区では重機掘削・遺構検出・遺構掘削・写真撮影・実測作業・遺物取り上げ作業を行い、令和３年９月８日付けで、機材の撤収を完了し、現地調査を終了した。その後、９月９日より整理作業を開始し、令和４年（2022）５月 31 日付けで本報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

なお、本調査では、平面図は光波測距機で作成し、断面図は手描きで作成した。また、写真撮影は、Canon 社製のフルサイズの一眼レフカメラ（EOS 5D Mark Ⅲ）、及び同社製の APS－C サイズの一眼レフカメラ（EOS Kiss X７）を使用し、RAW・TIFF・JPEG 形式でデータを保存している。

2　位置と環境

地理的環境　松原市は大阪府のほぼ中央に位置する、面積 16.6 ㎢人口 117,926 人（令和３年 12 月時点）の都市である。

市域の東側には、羽曳野丘陵からのびる河内台地、西側には陶器山丘陵からのびる泉北台地があり、その間には沖積地が広がり、扇状地となる。市域の北を西流するのは宝永元年（1704）に付け替えられた大和川で、河内台地の裾を東除川、泉北台地の裾を西除川が北流する。

堀遺跡は古墳時代～近世の集落跡で、松原市天美南１～6 丁目に所在する。西除川右岸に位置し、日下雅義氏の地形分類図（『松原市史』第１巻所収）によると自然堤防･氾濫原に位置する。標高は概ね 13～14 ｍである。調査地の西約 250 ｍの西除川の堤防沿いに、下高野街道がはしっている。

歴史的環境　松原市域では、旧石器～縄文時代の明確な遺構はない。遺物としては、三宅西遺跡で河道から縄文時代後期の土器がまとまって出土している。

弥生時代としては、高木遺跡で後期の竪穴住居が２棟確認されている。

古墳時代については､東新町遺跡で前期の方形周溝墓、高木遺跡で前期の土器だまりが検出されている。堀遺跡では、後期の掘立柱建物２棟と総柱建物の倉庫１棟が確認されている。大和川今池遺跡では、当該期に集落が形成され、４世紀後半～末と６世紀前半の方墳が各１基確認されている。また、同遺跡では、難波宮からのびる直線道路の難波大道が検出されている。

松原市域は、律令制下の郡では河内国丹比郡に属する。本市域を構成する郷は三宅・依羅・田邑と八下郷の一部で、土師郷を含む説もある。堀遺跡付近は依羅または田邑郷に含まれる。

奈良～平安時代には、堀遺跡、高木遺跡、大和川今池遺跡などで集落等が認められる。堀遺跡では、８世紀後半～９世紀前半の集落と条里に基づく水田が検出されている。高木遺跡では、奈良時代前期に遡る可能性がある条里に基づく水田や、８世紀後半～９世紀中頃に条里地

図２　発掘調査地及び近隣の調査地位置図　1：5,000

割を意識した官衙関連の大型建物が確認されている。出土遺物には海獣葡萄鏡・硯があり、官人等の居住が想定されている。以上のことから、今回の調査地付近は、奈良～平安時代前期頃に開発が進んだとみられる。高木遺跡の集落は９世紀末～ 10 世紀前半にも続くが、建物が小規模となり、方位や条里区画への意識も低下し、集落内に変化が起こっている。大和川今池遺跡では、複数の地点で奈良時代の集落が検出され、遺跡の南東部で平安時代の集落が形成されている。

丹比郡は遅くても 11 世紀後半頃に、丹北郡・丹南郡・八上郡に分割される。堀遺跡の位置は丹北郡に属する。帰属した荘園は不明だが、西除川を挟んだ付近（江戸時代の高木村）に西琳寺領高木荘が比定されている。本荘園は弘安４年（1281）には成立している。

中世の動向をうかがえる資料は少ないが、発掘調査では、堀遺跡で水田が見つかり、大和川今池遺跡で集落が確認されている。

なお、調査地付近は江戸時代の堀村の範囲内にある。同村は、当初は幕府領だったが、延宝７年（1679）より旗本小出氏の領地となり、寛保３年（1743）に小出氏の断絶後、再び幕府領となった。その後、宝暦９年（1759）より丹南藩高木氏の所領となり、幕末に至る。

３　近隣の調査成果（図２・３）

ここでは、近隣の既往の調査について述べる。

調査地の南側では、大阪府教育委員会により都市計画道路堺港大堀線建設工事に伴い発掘調査が実施された。

最も古い遺構は奈良時代後期（８世紀後半）で、条里と方位が異なる道路状遺構（B～D区）や轍（C～D区）が検出されている。A区では、畦畔と多数の足跡が見つかり、水田が形成されていたことがわかった。続く、奈良時代後期～平安時代前期（８世紀後半～９世紀前半）が中心となる時期で、B区で５棟の掘立柱建物、B～D区で条里水田が検出され、条里水田の施行時期や集落と水田の関係が明らかになった。

平安時代前期～中期（９世紀後半～ 10 世紀代）には、A 区で、西除川の旧流路と堤、B 区で木枠をもつ井戸と大畦畔が見つかっている。C～D区は耕作域（水田）と考えられている。井戸は集落に伴うと推定され、付近に集落の存在が想定されている。

平安時代後期以降は、水田や畦畔など耕作に関わる遺構が検出されているが、A区では 13 世紀初頭～前半頃の井戸が確認され､付近に集落の存在が推定されている。

遺跡の南東部では、松原市教育委員会が宅地造成工事に伴う発掘調査を実施した（図３）。

古墳時代後期の掘立柱建物３棟を検出し、うち１棟は柱穴の掘方が一辺１ｍ以上もある総柱建物で、倉庫とみられる。これらの建物は建築方位が類似し、同方位の柵列や溝も確認されていることから、区画施設によって囲まれていた可能性がある。出土遺物には、土師器、須恵器、滑石製紡錘車がある。また、奈良時代の掘立柱建物も検出し、土師器、須恵器、平瓦、丸瓦が出土している。（C ４−３−14：報告書未刊行）

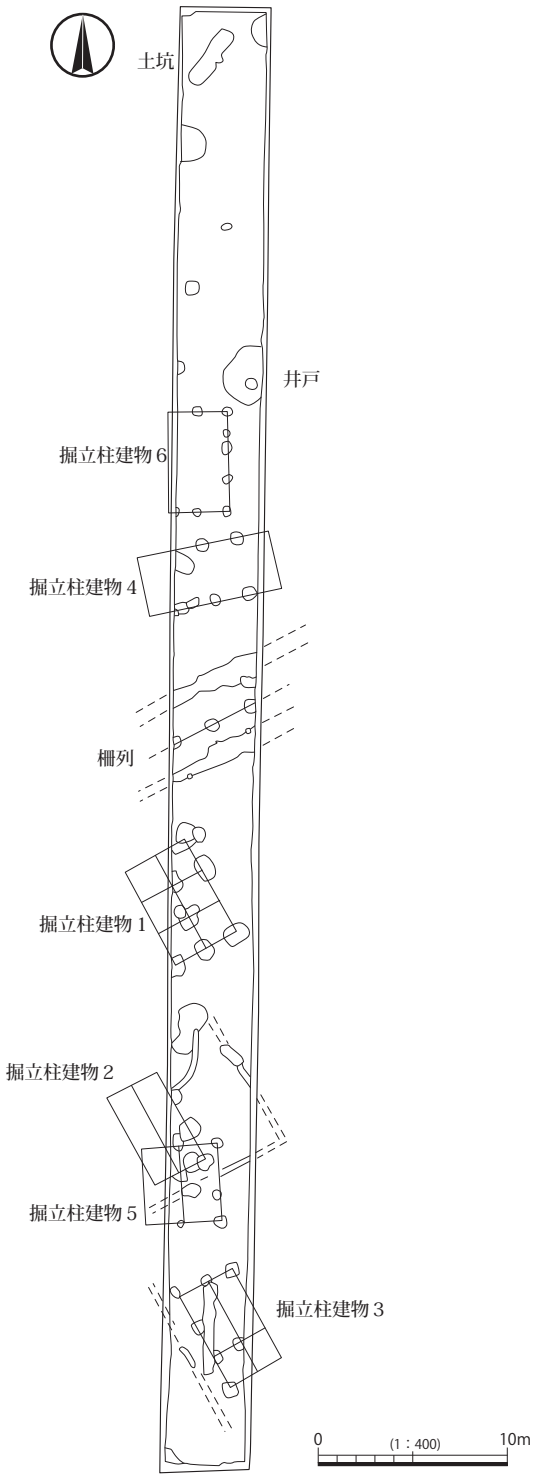


図３　堀遺跡（C ４−３−14）遺構略平面図　1：400

4　基本層序（図4・38～43）

調査地の現況は、アスファルト舗装の駐車場として利用され、近代以降の都市開発以前は農耕地であった。現地表面の標高は、調査区東側で12.9 m、西側で12.9 m、南側で13.0 m、北側で12.7 mを測る。高低差は0.3 mを測り、南側が若干高い数値となる。

調査地における堆積土層は、第0層から第13層に分層することができる。層序は、上から第0層：盛土・攪乱層、第1層：耕土層、第2層：床土層、第3～6層：包含層（旧耕土層）、第7層：包含層、第8～13層：基盤層である。

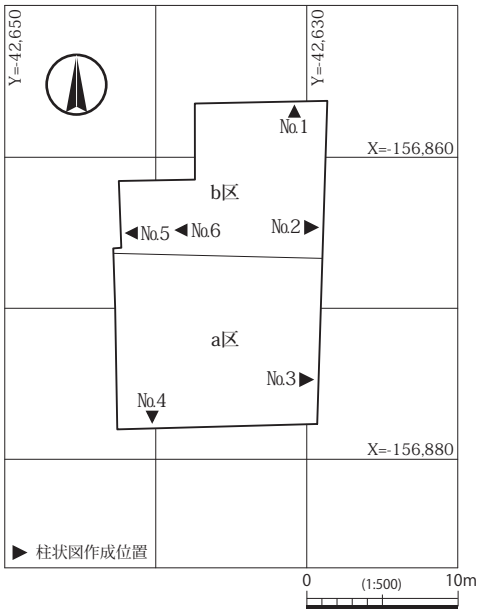
第1層は耕土層である。第1層の上面標高は、調査区東側で12.4 m、西側で12.4 m、南側で12.5 m、北側では12.2 mを測る。北側が若干低い数値となっているが、上層が後世に削平されたためと推測される。

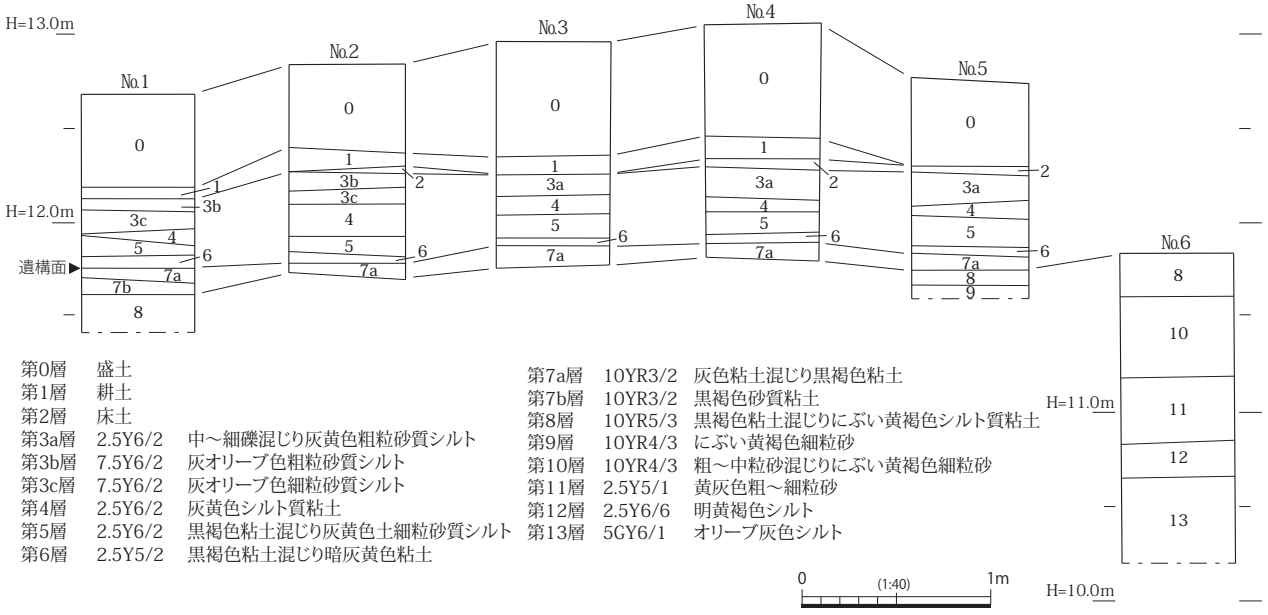
第2層は第1層に伴う床土層である。2～5 cm程度の層厚であるが、必ずしも存在するわけではない。

第3～6層は遺物を含む包含層であるが、調査においては、歴史的に過去の耕作土層を積み上げた人為的堆積土層である。本層は耕土層の累積であるがゆえに水平に堆積する幾層かの土層に細分することが可能である。そのため、土質の違いや含有物の多寡により第3層はa･b･c層に細分した。第3層の上面標高は、調査区東側で12.3 m、西側で12.2 m、南側で12.3 m、北側で12.2 mを測り、概ね平坦である。

第7層は包含層で、自然堆積層と推測される。第6層とは色調と土質が明らかに異なり区分が容易である。土質の違いや含有物の多寡により第7層はa･b層に細分した。第7層上面は今回の調査における遺構検出面でもある。検出した遺構の埋土は第7層を由来とするものが主体である。そのため遺構の識別が困難であり、状況に応じて第7層下面まで掘削し遺構確認を行った。第7層の上面標高は、調査区東側で11.8 m、西側で11.9 m、南側で11.9 m、北側で11.8 mを測り、概ね平坦である。

第7層下面は本調査地点の基盤層と推測される。基盤層以下の下層確認調査は102井戸の断ち割り調査と並行して実施した。標高11.6 m以下で河川堆積層と推測される粗～細砂層、シルト層が確認された。





第0層	盛土	
第1層	耕土	
第2層	床土	
第3a層	2.5Y6/2	中～細礫混じり灰黄色粗粒砂質シルト
第3b層	7.5Y6/2	灰オリーブ色粗粒砂質シルト
第3c層	7.5Y6/2	灰オリーブ色細粒砂質シルト
第4層	2.5Y6/2	灰黄色シルト質粘土
第5層	2.5Y6/2	黒褐色粘土混じり灰黄色土細粒砂質シルト
第6層	2.5Y5/2	黒褐色粘土混じり暗灰黄色粘土
第7a層	10YR3/2	灰色粘土混じり黒褐色粘土
第7b層	10YR3/2	黒褐色砂質粘土
第8層	10YR5/3	黒褐色粘土混じりにぶい黄褐色シルト質粘土
第9層	10YR4/3	にぶい黄褐色細粒砂
第10層	10YR4/3	粗～中粒砂混じりにぶい黄褐色細粒砂
第11層	2.5Y5/1	黄灰色粗～細粒砂
第12層	2.5Y6/6	明黄褐色シルト
第13層	5GY6/1	オリーブ灰色シルト

図4　基本土層柱状図　1：40・1：500

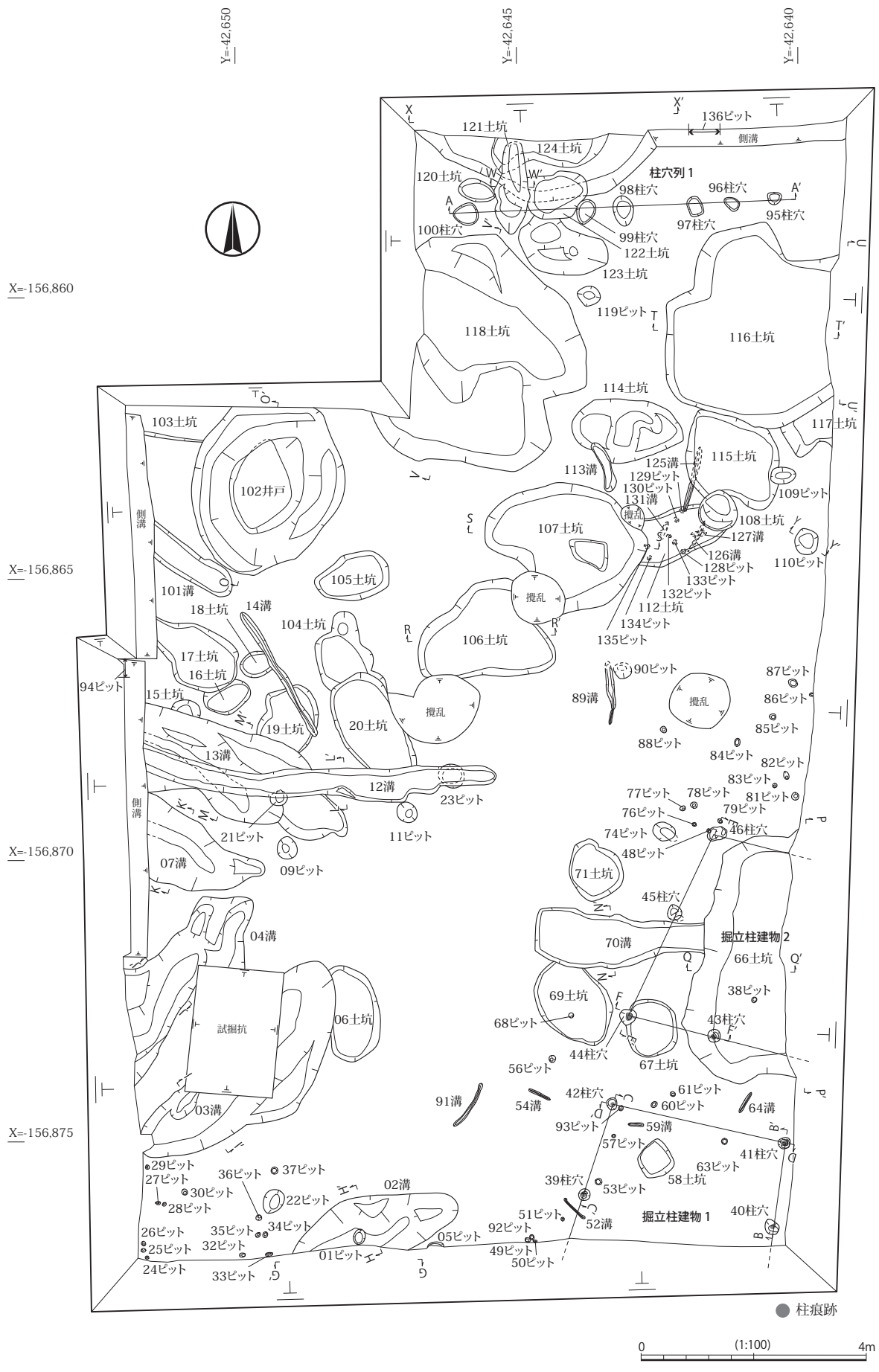


図5　調査区平面図　1：100

5　検出遺構（図5～8・10～37、表1）

検出した遺構は124基である。内訳は溝20条、井戸1基、土坑29基、柱穴14基、ピット60基である。また、柱穴の配列状況から柱穴列1列と掘立柱建物2棟を復元した。以下、検出した遺構を種別ごとに記述し、本文掲載以外の遺構は一覧表を付した。

（1）柱穴列

柱穴列1（図5・6・12・14）　柱穴列1は調査区北部で検出した。東西方向に柱穴6基が並ぶ。主軸方位はN－88°－Eである。95～100柱穴で構成される。検出長5.82 m、柱間寸法は西から2.15・0.65・1.28・0.67・0.75 mである。99柱穴と100柱穴の間は121土坑により消失したと推測される。柱穴の平面形は不整楕円形を呈する。柱穴の径は0.24～0.54 m、深さ0.04～0.10 mを測る。柱痕跡は確認出来なかった。埋土は明黄褐色シルト質粘土である。いずれも柱穴から土師器の細片が出土している。

（2）掘立柱建物

掘立柱建物1（図5・6・13～15）　掘立柱建物1は調査区南東部で検出した。南北1間以上（平均1.64 m）、東西1間（平均3.29 m）で、南側は調査区外に延びる。主軸方位はN－15°－Eである。39～42柱穴で構成される。柱穴の平面形は円形を呈する。柱穴の径は0.22～0.30 m、深さ0.18～0.28 m、柱痕跡の径は0.08～0.12 mを測る。埋土は柱痕跡が黒褐色シルト質粘土、掘方が黒褐色粘土または暗灰黄色細粒砂質粘土である。41柱穴の柱痕跡から土師器の細片が出土している。

掘立柱建物2（図5・6・15～17）　掘立柱建物2は調査区南東部で検出した。南北2間（3.65 m）、東西1間以上（1.55 m）で、東側は調査区外に延びる。主軸方位はN－25°－Eである。43～46柱穴で構成される。柱穴の平面形は円形を呈する。柱穴の径は0.28～0.34 m、深さ0.17～0.23 mである。柱痕跡の径は0.10～0.12 mを測る。埋土は柱痕跡が黒褐色シルト質粘土、掘方は黒褐色粘土が主体である。66・67土坑を切り、48ピットに切られる。遺物は出土していない。

（3）溝

02溝（図5・6・18）　02溝は調査区南部で検出した。南西から北東方向に走る。南側は調査区外に延びる。検出長3.10 m、最大幅1.30 m、深さ0.61 mを測る。断面形は逆台形を呈し、北側が中位から緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色粘土や灰黄褐色砂質粘土が主体である。01ピットに切られる。遺物は出土していない。

03溝（図5・6・19）　03溝は調査区南西部で検出した。南西から北東方向に走る。西側はわずかに調査区外に延びる。検出長4.63 m、最大幅2.00 m、深さ0.43 mを測る。断面形は逆台形を呈し、部分的に落ち込みを有する。埋土の上層は黒褐色細粒砂質粘土、中～下層は灰黄褐色系砂質粘土である。06土坑を切る。遺物は出土していない。

04溝（図5・6・20）　04溝は調査区南西部で検出した。南西から北東方向に走る。西側は調査区外に延びる。検出長4.00 m、最大幅1.42 m、深さ0.82 mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土の上層は黒褐色細粒砂質粘土、中～下層は黄褐色系シルト～砂質粘土である。遺物は出土していない。

07溝（図5・7・21）　07溝は調査区西部で検出した。北西から南東方向に走る。西側は調査区外に延びる。検出長3.35 m、最大幅1.80 m、深さ0.70 mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土の上～中層は黒褐色粘土が主体で、下層は灰オリーブ色細粒砂質シルトである。遺物は出土していない。

12溝（図5・7・22）　12溝は調査区西部で検出した。東西方向に走る。西側は調査区外に延びる。検出長6.48 m、幅0.35～0.58 m、深さ0.05 mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト質粘土である。13溝、20土坑、21・23ピットを切る。遺物は須恵器杯蓋・壺、土師器、製塩土器等が出土している。

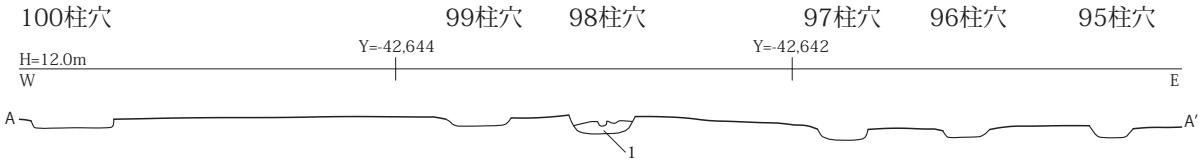
13溝（図5・7・23）　13溝は調査区西部で検出した。北西から南東方向に走る。西側は調査区外に延びる。検出長5.40 m、最大幅1.20 m、深さ0.56 mを測る。断面形は逆台形を呈し、北側が中位から緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色中～細粒砂質粘土や黒褐色細粒砂質粘土が主体である。15・19土坑を切り、12溝、21ピットに切られる。遺物は土師器の細片が出土している。

70溝（図5・7・24）　70溝は調査区南東部で検出した。東西方向に走る。検出長3.02 m、幅0.49～1.06 m、深さ0.10 mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色細粒砂質粘土と灰黄褐色細粒砂質シルトである。66土坑に切られる。遺物は出土していない。

（4）井戸

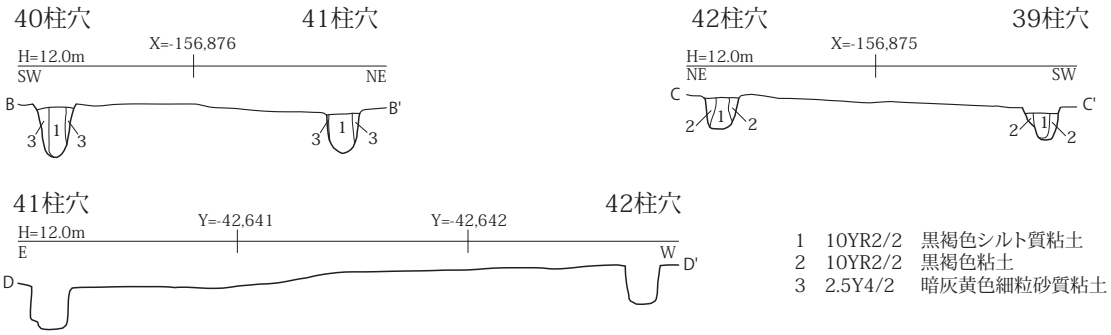
102井戸（図5・7・25～28）　102井戸は調査区西部で検出した。北側は調査区外に延びる。直径約2.8 m、深さ1.74 mを測る。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈し、上部が漏斗状に立ち上がる。埋土の上層は黒褐色細粒砂～粘土、中層は黒色粘土、下層は炭化物や植物質腐植土を含む黒褐色粗粒砂質粘土が主体である。井筒等

柱穴列1



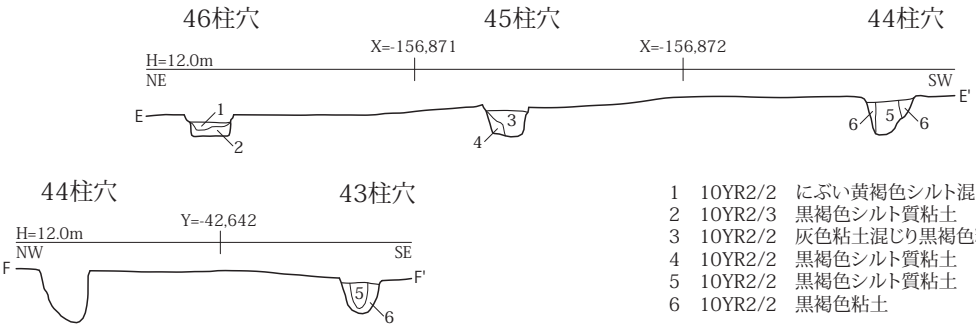
1　2.5Y7/6　中～細礫混じり明黄褐色シルト質粘土

掘立柱建物1



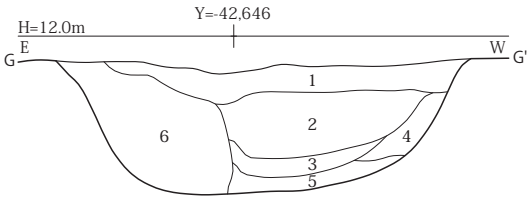
1　10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
2　10YR2/2　黒褐色粘土
3　2.5Y4/2　暗灰黄色細粒砂質粘土

掘立柱建物2



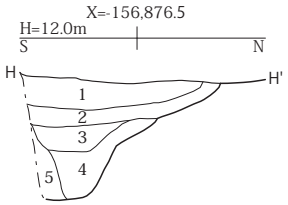
1　10YR2/2　にぶい黄褐色シルト混じり黒褐色粘土
2　10YR2/3　黒褐色シルト質粘土
3　10YR2/2　灰色粘土混じり黒褐色粘土
4　10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
5　10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
6　10YR2/2　黒褐色粘土

02溝①（南）

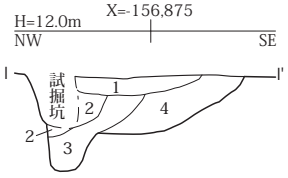


1　10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
2　10YR2/3　中～細礫混じり黒褐色粘土
3　10YR2/2　黒褐色シルト質粘土
4　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂質粘土
5　10YR4/2　中～細礫混じり灰褐色粘土
6　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂質粘土

02溝②（西）

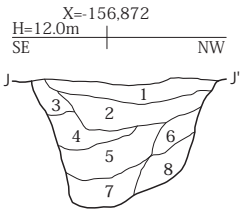


03溝



1　10YR3/2　黒褐色細粒砂質粘土
2　10YR5/4　にぶい黄褐色中粒砂質粘土
3　10YR5/2　灰黄褐色中粒砂質粘土
4　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂質粘土

04溝



1　10YR2/2　炭化物混じり黒褐色細粒砂質粘土
2　10YR2/3　炭化物混じり黒褐色細粒砂質粘土
3　10YR5/3　にぶい黄褐色細粒砂質粘土
4　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂質粘土
5　10YR3/3　黄褐色細粒砂混じり暗褐色粘土
6　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂質粘土
7　10YR5/2　灰黄褐色シルト質粘土
8　10YR4/3　黄褐色細粒砂混じりにぶい黄褐色シルト質粘土

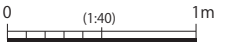
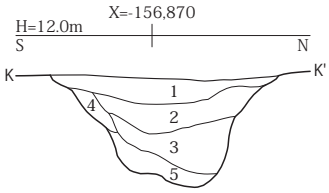


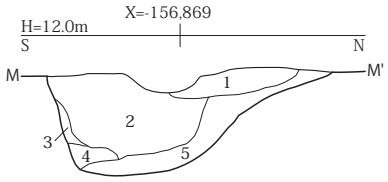
図6　遺構断面図（1）　1：40

07溝



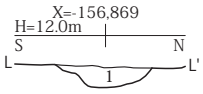
1　10YR2/3　灰黄褐粘土混じり黒褐色細粒砂質粘土
2　10YR2/3　黄褐色粘土混じり黒褐色粘土
3　10YR2/2　黒褐色粘土
4　10YR3/2　灰黄褐色粘土混じり黒褐色粘土
5　5Y5/3　黒褐色粘土混じり灰オリーブ細粒砂質シルト

13溝



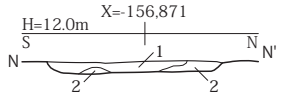
1　10YR2/3　細礫混じり黒褐色粘土
2　10YR5/4　にぶい黄褐色中粒砂質粘土
3　10YR5/4　にぶい黄褐色細粒砂質粘土
4　10YR5/4　にぶい黄褐色細粒砂質シルト
5　10YR2/3　黒褐色細粒砂質粘土

12溝



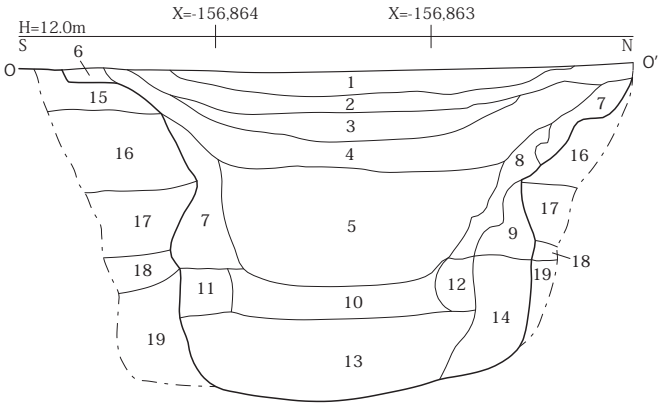
1　10YR2/3　黒褐色シルト質粘土

70溝



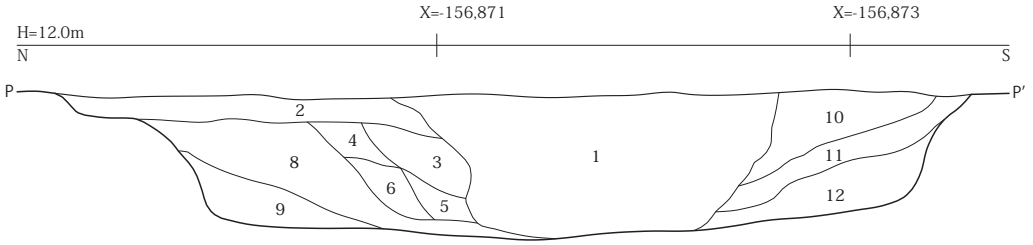
1　10YR2/3　黒褐色細粒砂質粘土
2　10YR5/2　灰黄褐色細粒砂質シルト

102井戸

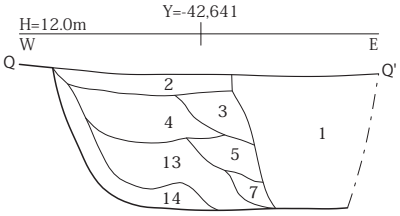


1　10YR4/2　灰黄褐細粒砂質粘土
2　10YR3/2　黒褐色細粒砂質粘土
3　10YR3/1　黒褐色シルト質粘土
4　10YR2/2　炭化物混じり黒褐色粘土
5　10YR2/1　炭化物混じり黒色粘土
6　10YR3/2　黒褐色細粒砂質粘土
7　10YR4/2　灰黄褐色シルト質粘土
8　10YR4/2　灰黄褐色シルト質粘土
9　2.5Y6/2　灰黄色粘土質粗粒砂
10　10YR2/1　炭化物・植物質腐植土混じり黒色粘土
11　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土
12　2.5Y5/1　黄灰色粘土質粗砂
13　10YR3/1　炭化物・植物質腐植土・大～細礫混じり黒褐色粗粒砂質粘土
14　2.5Y4/1　黄灰色シルト質粘土
15　基本土層　第８層
16　基本土層　第10層
17　基本土層　第11層
18　基本土層　第12層
19　基本土層　第13層

66土坑①（東）

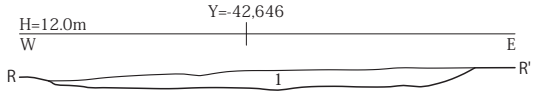


66土坑②（南）



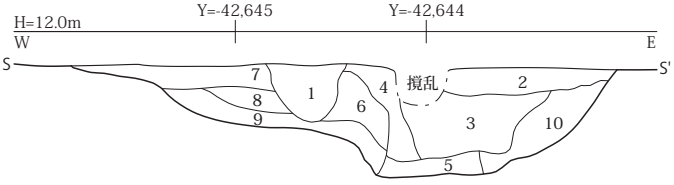
1　10YR6/2　灰褐色粘土質細粒砂
2　10YR3/2　黒褐色細粒砂質粘土
3　10YR3/3　暗褐色細粒砂質粘土
4　10YR3/2　黒褐色粘土
5　10YR3/2　黒褐色中粒砂質粘土
6　10YR3/2　褐灰色粘土混じり黒褐色粘土
7　10YR3/3　暗褐色細粒砂質粘土
8　10YR3/1　褐灰色粘土混じり黒褐色粘土
9　10YR3/3　暗褐色細粒砂質粘土
10　10YR6/6　明黄褐色シルト質細粒砂
11　10YR3/2　黒褐色中粒砂質粘土
12　10YR4/2　灰黄褐色中粒砂質粘土
13　10YR3/2　褐灰色粘土混じり黒褐色粘土
14　10YR3/3　暗褐色粗粒砂質粘土

106土坑



1　10YR2/3　黒褐色細粒砂質粘土

107土坑



1　10YR5/4　にぶい黄褐色細粒砂質粘土
2　10YR2/3　黒褐色粘土
3　10YR3/1　炭化物混じり黒褐色粘土
4　10YR5/2　灰黄褐色粗粒砂質粘土
5　10YR4/2　灰黄褐色粗粒砂質粘土
6　10YR4/4　炭化物混じり褐色粘土
7　10YR4/3　にぶい黄褐色粗粒砂質粘土
8　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
9　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト質粘土
10　10YR5/6　黄褐色粘土質粗粒砂

0　(1:40)　1m

図７　遺構断面図（２）　１：40

が検出されていないことから素掘り井戸と推測される。103 土坑を切る。遺物は上層から弥生土器壺または甕底部、土師器高杯･杯･壺、臼玉等（1～7）、須恵器甕、中･下層から土師器甕が出土している。

（5）土坑

66 土坑（図 5・7・29・30）　66 土坑は調査区南東部で検出した。東側は調査区外に延びる。長軸 4.46 m、検出短軸 2.05 m、深さ 0.70 mを測る。平面形は不整長方形と推測される。断面形は逆台形を呈する。埋土の上層は灰褐色粘土質細粒砂、中層は黒褐色粘土、下層は暗褐～灰黄褐色細～中粒砂質粘土が主体、遺構中央部は灰褐色粘土質細粒砂である。70 溝を切り、38 ピット、43 柱穴に切られる。遺物は上層から平安時代前期の土師器皿（8）が出土している。

106 土坑（図 5・7・31）　106 土坑は調査区北部で検出した。長軸 2.43 m、短軸 1.73 m、深さ 0.08 mを測る。平面形は不整楕円形、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色細粒砂質粘土である。遺物は出土していない。

107 土坑（図 5・7・32）　107 土坑は調査区北部で検出した。長径 2.88 m、短径 2.34 m、深さ 0.53 mを測る。平面形は不整楕円形と推測される。断面形は逆台形を呈し、西側は緩やかに立ち上がる。中央部に落ち込みを有する。埋土は黒褐色粘土や黄褐色系細～粗粒砂が主体である。112 土坑、135 ピットを切る。遺物は出土していない。

116 土坑（図 5・8・33）　116 土坑は調査区北東部で検出した。長軸 3.65 m、検出短軸 3.04 m、深さ 0.55 mを測る。平面形は不整楕円形と推測される。断面形は逆台形を呈する。埋土の上層は褐灰色細粒砂質粘土、中層は黒褐色細粒砂質粘土や灰黄褐色粘土、下層は黄褐色系粗粒砂～粘土が主体である。117 土坑を切り、115 土坑に切られる。遺物は土師器高杯・壺等（9～13）が出土している。

118 土坑（図 5・8・34）　118 土坑は調査区北部で検出した。長軸 4.16 m、検出短軸 3.80 m、深さ 0.73 mを測る。平面形は不整楕円形と推測される。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色極粗粒～細粒砂質粘土や同粘土、黒褐色砂質粘土が主体である。土師器高杯等が出土している。

121 土坑（図 5・8・35）　121 土坑は調査区北部で検出した。北側は排水用に掘削した側溝により消失した。検出長軸 1.20 m、短軸 0.65 m、深さ 0.12 mを測る。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。埋土の上層は暗褐色砂質粘土、下層は灰黄褐色粘土である。120・122・124 土坑を切る。遺物は土師器高杯（14）・甕等が出土している。

124 土坑（図 5・8・36）　124 土坑は調査区北部で検出した。検出長軸 4.20 m、検出短軸 1.10 m、深さ 0.53 mを測る。平面形は不明、断面形は皿状を呈する。埋土はにぶい黄褐色粗～細粒砂質粘土、灰黄褐色粗粒砂～粘土、黒褐色粗粒砂質粘土が主体である。121・122 土坑に切られる。遺物は土師器高杯(15)･甕が出土している。

（6）ピット

110 ピット（図 5・8・37）　110 ピットは調査区北東部で検出した。長径 0.47 m、短径 0.42 m、深さ 0.34 mを測る。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。埋土は黒褐色粗～細粒砂質粘土、褐灰色粘土である。遺物は土師器甕・小型壺・高杯等（16・17）が出土している。

6　出土遺物（図 9・44～48）

出土した遺物は総点数914 点である。内訳は弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、石製品、石器である。遺物の多くが器面の摩耗した土器の細片であり器種や部位が不明瞭なものであったが可能な限り図化に努めた。以下、出土遺物について遺構出土遺物、遺構外出土遺物に分けて記述する。

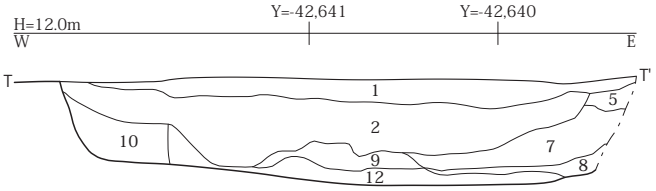
（1）遺構出土遺物

102 井戸（図 9・44・48）　1 は土師器杯の口縁～底部である。口縁部は僅かに内傾する。2 は土師器高杯の杯部である。3 は弥生土器の壺または甕の底部である。4 は土師器高杯の脚部である。脚部内面にしぼり目痕が残る。裾部が直線的に開く。5 は土師器高杯の脚部である。脚部は上部に膨らみを有し、やや裾広がりの筒状を呈する。内面にしぼり目痕が残る。6 は土師器壺の口縁～体部の上部である。口縁部は欠損する。口縁部は外反し、くの字を呈する。摩耗のため調整は不明であるが、口縁部内面はヨコナデ、体部外面は斜位のハケとヨコハケが施される。口縁部外面には輪積み痕が残る。7 は石製品で滑石製の臼玉である。直径 0.37 cm、厚さ 0.08 cm を測る。中心部に直径 0.1 cm の孔を穿つ。以上の遺物は 3 を除き、古墳時代中期に帰属するとみられる。

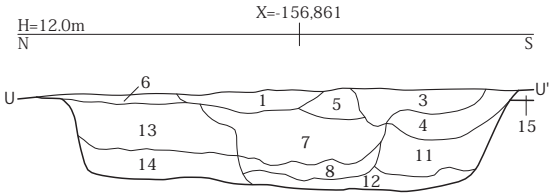
66 土坑（図 9・45）　8 は土師器皿である。底部から口縁部に向けて緩やかに外反する。9 世紀前半～ 9 世紀中頃に比定される。

116 土坑（図 9・46）　9～11 は土師器高杯の杯部である。いずれも底面は平坦である。9 は底部から体部へは直線的に立ち上がる。12 は土師器高杯の脚部である。

116土坑①(北)

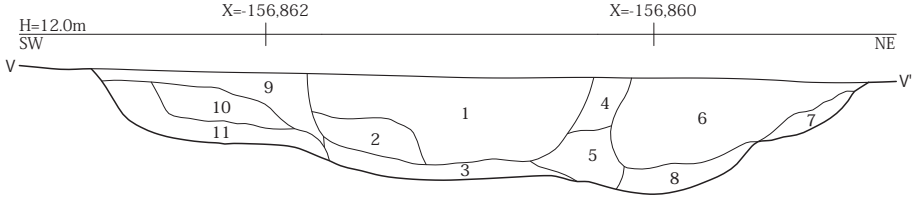


116土坑②(東)



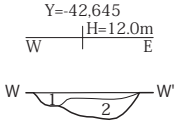
1 10YR4/1 褐灰色細粒砂質粘土
2 10YR3/2 黒褐色細粒砂質粘土
3 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質粘土
4 10YR4/2 灰黄褐色粘土
5 10YR3/3 暗褐色粘土
6 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質粘土
7 10YR4/2 灰黄褐色粘土
8 10YR5/1 褐灰色粘土
9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質粗～細粒砂
10 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質粘土
11 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂質粘土
12 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂
13 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂質粘土
14 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質粘土
15 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土[117土坑埋土]

118土坑



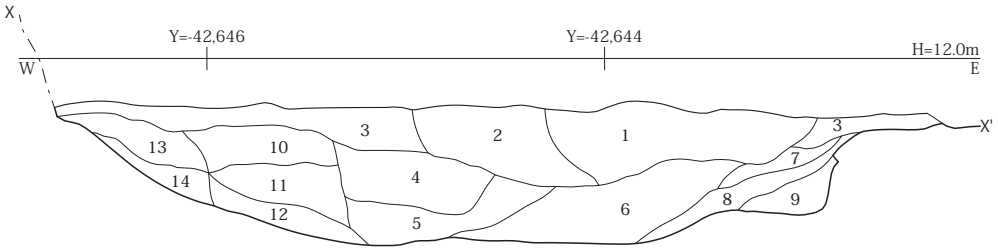
1 10YR4/2 中～細礫混じり灰黄褐色極粗粒砂質粘土
2 10YR4/2 灰黄褐色極粗粒砂質粘土
3 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
4 10YR4/2 灰黄褐色粘土
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質粘土
6 10YR2/2 黒褐色砂質粘土
7 10YR4/2 灰黄褐色粘土
8 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土
9 10YR3/2 黒褐色極粗粒砂質粘土
10 10YR4/2 灰黄褐色粘土
11 10YR4/2 灰黄褐色砂質粘土

121土坑

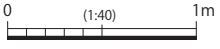


1 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
2 10YR4/2 灰黄褐色粘土

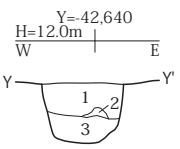
124土坑



1 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂・細礫
2 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂・細礫
3 10YR3/2 中～細礫混じり黒褐色粗粒砂質粘土
4 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂質粘土
5 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂質粘土
6 10YR5/4 中～細礫混じりにぶい黄褐色粗粒砂質粘土
7 10YR4/2 灰黄褐色粘土
8 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土
9 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂・細礫
10 10YR3/3 暗褐色粘土
11 10YR3/2 黒褐色粗粒砂質粘土
12 10YR4/2 灰黄褐粗粒砂質粘土
13 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂質粘土
14 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂質粘土



110ピット



1 10YR3/2 黒褐色細粒砂質粘土
2 10YR4/1 褐灰色粘土
3 10YR3/1 黒褐色粗粒砂質粘土

図8 遺構断面図（3） 1：40

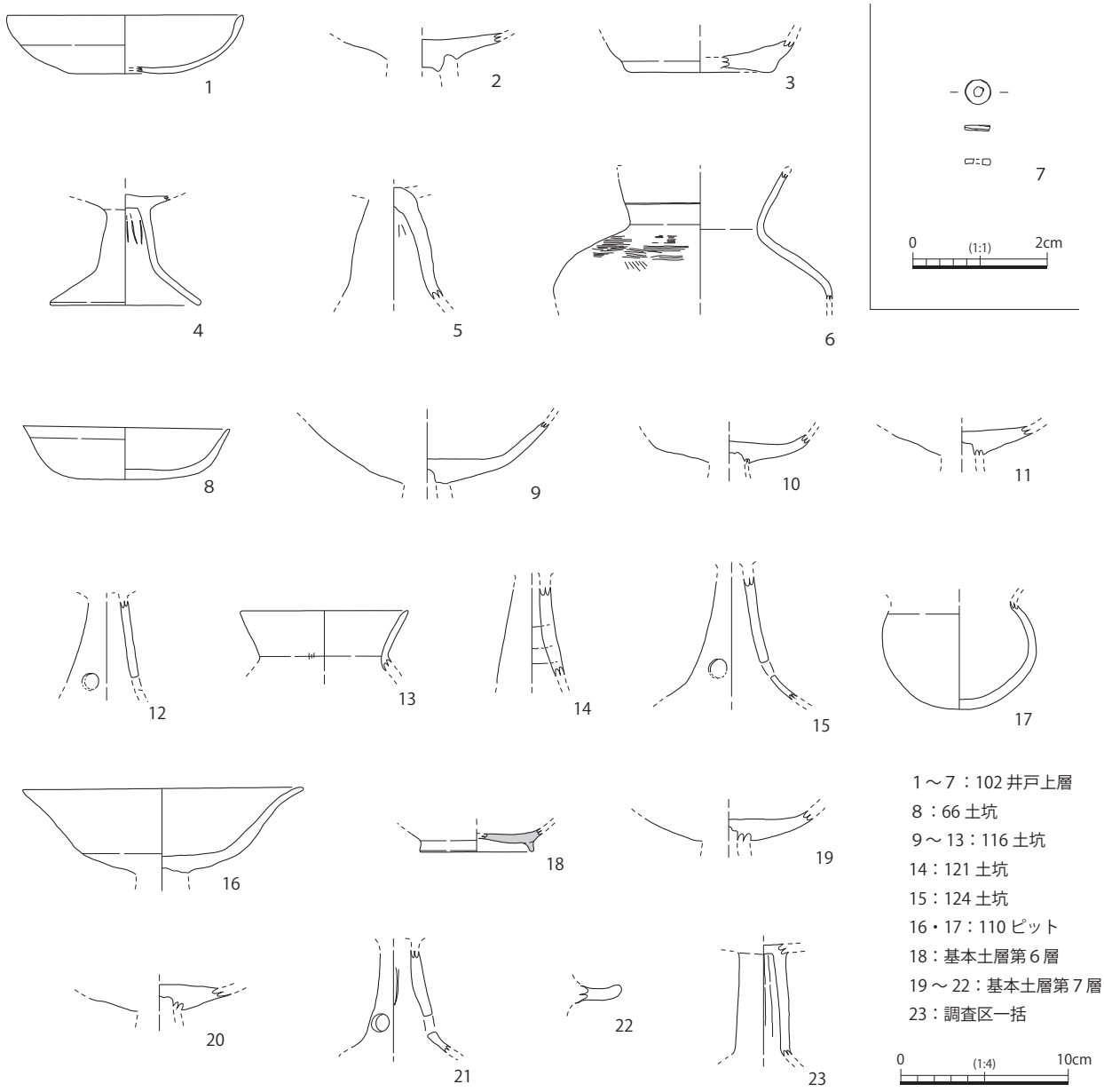


図９　出土遺物　1：1・1：4

脚部には３個の円形透かし孔が施され、やや裾広がりの筒状を呈する。13 は土師器壺の口縁部である。頸部外面にタテハケが施される。古墳時代中期前葉とみられる。

121 土坑（図９・45）　14 は土師器高杯の脚部である。脚部はやや裾広がりの筒状を呈する。内面には粘土の輪積み痕が残る。

124 土坑（図９・45）　15 は土師器高杯の脚部である。３個の円形透かし孔が施され、脚部はやや裾広がりの筒状を呈する。

110 ピット（図９・45）　16 は土師器高杯の杯部で、杯部はほぼ完存するが、脚部は欠損する。底面は平坦で、底部から口縁部は緩やかに外反する。内外面ともに摩耗や剥離が著しく調整は不明である。内面には焼成時の黒斑が残る。17 は土師器小型丸底壺の頸～底部である。これらは古墳時代中期前葉に比定される。

（２）遺構外出土遺物

基本土層第６層（図９・47）　18 は黒色土器Ａ類の椀または皿で、９世紀中～10 世紀中頃とみられる。

基本土層第７層（図９・47）　19・20 は土師器高杯の杯部である。21 は土師器高杯の脚部である。３個の円形透かし孔が施され、脚部はやや裾広がりの筒状を呈する。脚部内面はしぼり目痕が残る。22 は土師器羽釜の鍔部である。

調査区一括（図９・47）　23 は土師器高杯の脚部である。筒状を呈する。内面にはしぼり目痕が残る。

そのほか遺構外から土師器杯・椀・甕、須恵器壺・甕、サヌカイト製の剥片石器等が出土している。

7　総括

最後に、本調査地における土地利用の変遷を整理し、まとめとする。

古墳時代:時期が比定できる遺構は、102 井戸、116 土坑、110 ピットで、121・124 土坑もおおよその時期をうかがうことができる。建物など明確な居住遺構は検出できなかったが、102 井戸の存在と、当該時期の土器が 102 井戸・110 ピットからまとまって出土しているため、集落の縁辺部または周辺に集落が存在したと考えられる。本調査地付近は西除川の自然堤防・氾濫原に位置しており、微高地を利用した集落を想定できよう。

出土遺物については、914 点中 890 点が土師器で、それ以外は極少量であった。また、遺物の大半が細片である。須恵器は 15 点のみで、包含層を除くと 102 井戸と 12 溝から出土した。遺物の年代から、古墳時代の遺構は中期に帰属するとみられる。

今回の調査によって、堀遺跡における人々の活動が古墳時代中期にさかのぼることが明らかとなった。

平安時代～中世：掘立柱建物１・２の２棟、66 土坑を検出した。調査地は集落の一部にあたると考えられる。掘立柱建物２棟の主軸は類似しており、柱穴の規模からも同時併存か近い時期と想定される。構成する柱穴から時期を比定できる遺物は出土しなかったが、掘立柱建物２は９世紀前半～９世紀中頃に比定される 66 土坑との切り合い関係からそれ以降といえる。ただ、柱穴の規模から中世まで下る可能性もある。

大阪府教育委員会の調査（大阪府教委 2010）ではＢ区で９世紀後半～10 世紀中頃の木枠をもつ井戸、Ａ区で 13 世紀初頭～前半頃の井戸が見つかっており、付近に集落の存在が推定されている。本調査で新たに得た資料は、集落の広がりや複数の地点での集落の存在を今後検討するための一助となる。

なお、既往の調査では奈良時代後期以降の畦畔など水田に関わる遺構が検出されているが、本調査では確認できなかった。

近世以降：調査区土層断面に耕作土とみられる土層の累積が認められることから、近世以降は耕作地に転換したと考えられる。詳細な時期は不明だが、昭和 17 年(1942)の航空写真には建築物が確認できるため、それ以前に耕作地としての土地利用が終了したとみられる。

堀遺跡における本発掘調査は今回が第３次であり、今後の調査事例の増加に期待したい。

引用・参考文献

大阪府教育委員会 2010『堀遺跡』

笹栗拓 2017「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年―古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質―」『大阪文化財研究』第 50 号（公財）大阪府文化財センター

辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室

表１　非掲載遺構一覧表（１）

遺構番号		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	切り合い関係		出土遺物	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	切る遺構	切られる遺構		
01	ピット	楕円形	U字形	28	21	24	02		土師器	
05	ピット		U字形	(30)	(30)	14			無	
06	土坑	楕円形	皿状	173	91	6		03	無	
08										欠番
09	ピット	円形	皿状	40	36	11			無	
10										欠番
11	ピット	円形	U字形	38	34	21			無	
14	溝	溝状	V字形	257	12	16	18･19		無	
15	土坑	楕円形?	皿状	57	(50)	13		13	無	
16	土坑	楕円形	皿状	85	(63)	7		17	無	
17	土坑	不整楕円形	皿状	(200)	109	9	16		土師器	
18	土坑	楕円形	皿状	70	47	5		14	無	
19	土坑	不整楕円形	皿状	(135)	105	7		13･14	無	
20	土坑	楕円形	皿状	(200)	(105)	5	104	12	無	
21	ピット	円形	U字形	32	27	23	13	12	土師器(甕)	
22	ピット	楕円形	U字形	45	36	34			無	
23	ピット	円形	逆台形	(46)	41	10		12	無	
24	ピット	円形	U字形	6	6	5			無	
25	ピット	楕円形	U字形	8	6	12			無	
26	ピット	円形	U字形	9	7	6			無	
27	ピット	楕円形	U字形	8	6	5			無	
28	ピット	楕円形	U字形	8	5	12			土師器	
29	ピット	円形	U字形	8	8	17			無	
30	ピット	円形	U字形	10	10	14			無	
31										欠番
32	ピット	楕円形	U字形	10	7	5			無	
33	ピット	楕円形	U字形	12	7	10			無	
34	ピット	楕円形	U字形	10	8	6			無	
35	ピット	楕円形	U字形	10	9	3			無	
36	ピット	円形	U字形	10	10	6			無	
37	ピット	円形	U字形	13	13	5			無	

※遺構法量の(　)は残存値または推定値

表1　非掲載遺構一覧表（2）

遺構番号		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	切り合い関係		出土遺物	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	切る遺構	切られる遺構		
38	ピット	楕円形	U字形	7	7	12	66		無	
47										欠番
48	ピット	円形	U字形	8	7	7	46		無	
49	ピット	円形	U字形	10	9	14			無	
50	ピット	楕円形	U字形	8	5	8			土師器	
51	ピット	円形	U字形	7	7	7			無	
52	溝	溝状	U字形	52	4	3			無	
53	ピット	円形	U字形	12	12	11			無	
54	溝	溝状	U字形	42	6	3			無	
55										欠番
56	ピット	円形	U字形	13	13	25			土師器(甕)	
57	ピット	円形	U字形	8	6	7			無	
58	土坑	方形	皿状	71	67	18			無	
59	溝	溝状	U字形	26	6	13			無	
60	ピット	楕円形	U字形	12	9	16			無	
61	ピット	円形	U字形	8	8	14			無	
62										欠番
63	ピット	円形	U字形	11	10	13			無	
64	溝	溝状	U字形	41	6	9			無	
65										欠番
67	土坑	楕円形	皿状	105	101	7		44	無	
68	ピット	円形	U字形	7	7	20	69		無	
69	土坑	楕円形	皿状	156	116	7		68･70	無	
70	溝	溝状	皿状	(302)	106	10	69		無	
71	土坑	不整楕円形	皿状	113	96	6			無	
72										欠番
73										欠番
74	ピット	楕円形	U字形	41	32	22			無	
75										欠番
76	ピット	円形	U字形	8	7	11			無	
77	ピット	楕円形	U字形	11	9	11			無	
78	ピット	円形	U字形	12	11	12			無	
79	ピット	楕円形	U字形	10	8	10			無	
80										欠番
81	ピット	円形	U字形	14	13	18			無	
82	ピット	楕円形	U字形	15	10	10			無	
83	ピット	円形	U字形	8	8	7			無	
84	ピット	楕円形	U字形	14	10	5			無	
85	ピット	楕円形	U字形	12	10	4			無	
86	ピット	楕円形?	U字形	(10)	7	11			無	
87	ピット	円形	U字形	18	14	8			無	
88	ピット	楕円形	U字形	12	12	15			無	
89	溝	溝状	U字形	(150)	14	8			無	
90	ピット	円形?	U字形	32	(30)	10			無	
91	溝	溝状	V字形	90	5	3			無	
92	ピット	円形	U字形	9	8	19			無	
93	ピット	円形	U字形	9	8	7			無	
94	ピット?		U字形?	32		28			無	西壁面で検出
101	溝	溝状	皿状	(200)	50	6			土師器	
103	土坑		皿状	(150)	5	3		102	無	
104	土坑	不整楕円形	皿状	160	99	22		20	無	
105	土坑	楕円形	皿状	134	82	9			無	
108	土坑	円形	逆台形	73	69	10	112･115･126		無	
109	ピット	楕円形	皿状	46	29	6	115		無	
111										欠番
112	土坑	楕円形		(200)	79	3	125～135	107･108	無	
113	溝	溝状	皿状	91	17	6	114		無	
114	土坑	楕円形	有段皿状	196	115	9		113	無	
115	土坑	不整長方形	皿状	136	116	7	116	108･109	土師器	
117	土坑		皿状	(150)	(92)	6		116	土師器	
119	ピット	楕円形	皿状	44	38	9			無	
120	土坑	楕円形	皿状	65	39	8		121	土師器	
122	土坑	不整楕円形	皿状	(130)	76	5	123･124	121	土師器	
123	土坑	不整楕円形	皿状	152	85	17		122	無	
125	溝	溝状	V字形	117	7	5	129	112･115	無	
126	溝	溝状	V字形	63	8	3	127	112	無	
127	溝	溝状	U字形	29	9	8		112･126	無	
128	ピット	円形	U字形	10	8	13		112	無	
129	ピット	楕円形	U字形	9	8	7		112･125	無	
130	ピット	楕円形	U字形	10	8	16		112	無	
131	溝	溝状	U字形	33	8	7		112	無	
132	ピット	楕円形	U字形	8	6	12		112	無	
133	ピット	円形	U字形	9	9	11		112	無	
134	ピット	円形	U字形	8	7	4		112	無	
135	ピット	円形	U字形	10	9	6		107･112	無	
136	ピット?		V字形	(52)		15			無	北壁面で検出

※遺構法量の( )は残存値または推定値

図 10　a 区完掘全景（東から）

図 11　b 区完掘全景（東から）

図 12　柱穴列 1（南東から）

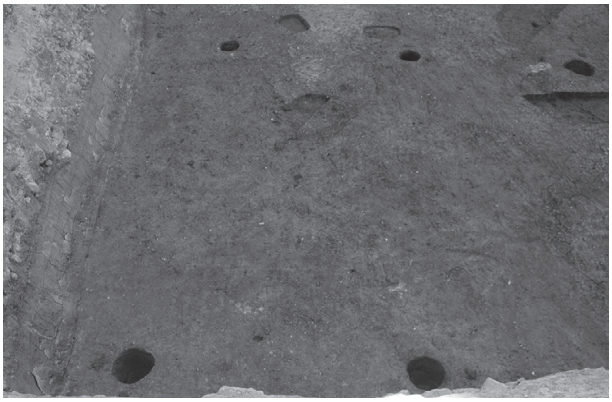


図 13　掘立柱建物 1（東から）

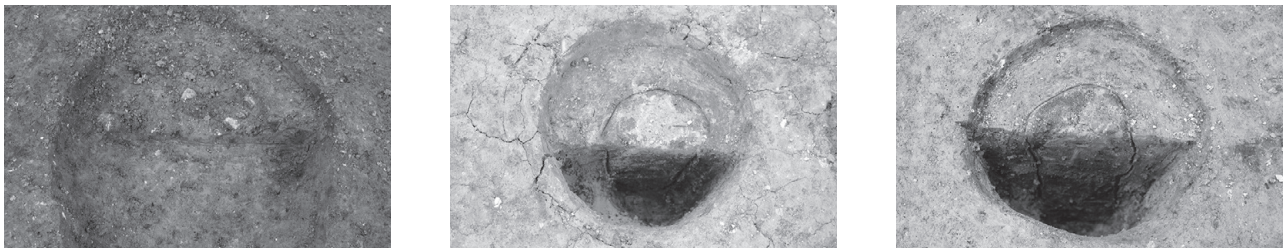


図 14　柱穴列 1（左：98 柱穴）断面（南から）、掘立柱建物 1（中央：39 柱穴、右：40 柱穴）断面（西から）

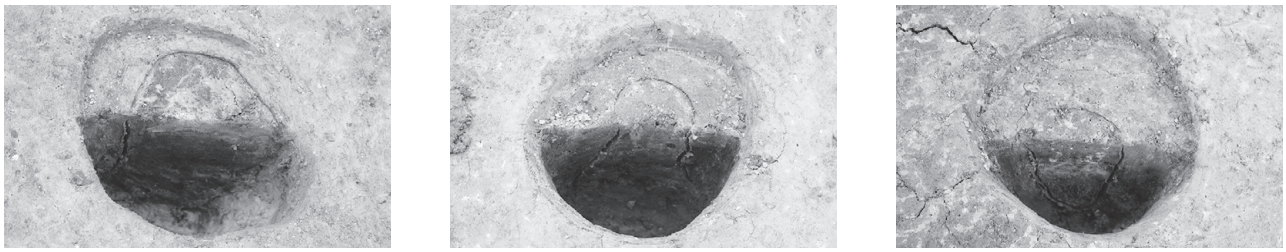


図 15　掘立柱建物 1（左：41 柱穴、中央：42 柱穴）断面（西から）、掘立柱建物 2（右：43 柱穴）断面（南から）

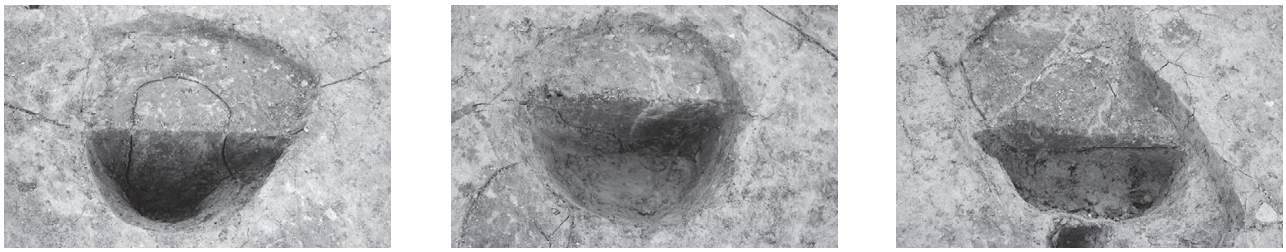


図 16　掘立柱建物 2（左：44 柱穴、中央：45 柱穴、右：46 柱穴）断面（西から）

図 17　掘立柱建物２完掘（南東から）

図 18　02 溝②断面（東から）

図 19　03 溝断面（南西から）

図 20　04 溝断面（北東から）

図 21　07 溝断面（南東から）

図 22　12 溝完掘（南西から）

図 23　13 溝断面（南東から）

図 24　70 溝完掘（西から）

図 25　102 井戸上層断面（東から）

図 26　102 井戸中層断面（東から）

図 27　102 井戸下層断面（東から）

図 28　102 井戸完掘（東から）

図 29　66 土坑①断面（西から）

図 30　66 土坑②断面（南から）

図 31　106 土坑断面（北から）

図 32　107 土坑断面（南から）

図 33　116 土坑①断面（南から）

図 34　118 土坑断面（東から）

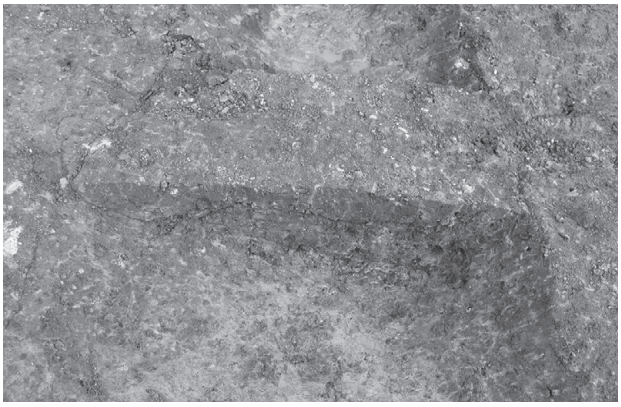


図 35　121 土坑断面（南から）

図 36　124 土坑断面（南東から）

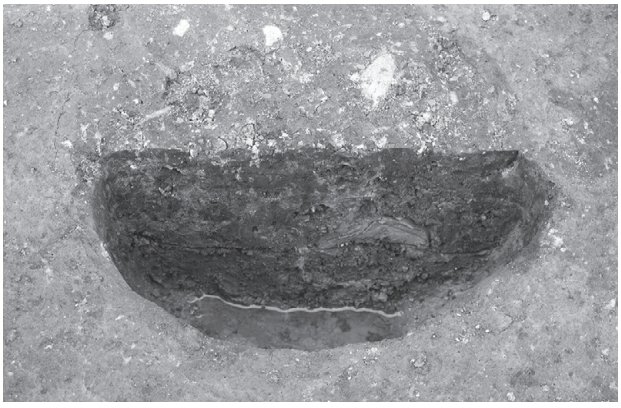


図 37　110 ピット断面（南から）

図 38　a 区東壁断面の一部（西から）

図 39　a 区南壁断面の一部（北から）

図 40　a 区西壁断面の一部（東から）

図 41　b 区西壁断面の一部（東から）

図 42　b 区北壁断面の一部（南から）

図 43　b 区東壁断面の一部（西から）

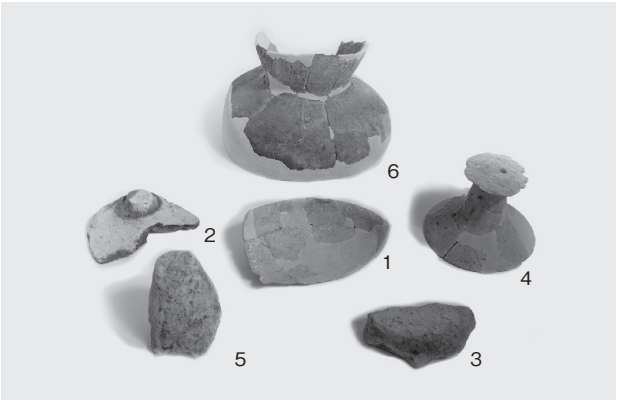


図 44　出土遺物 1

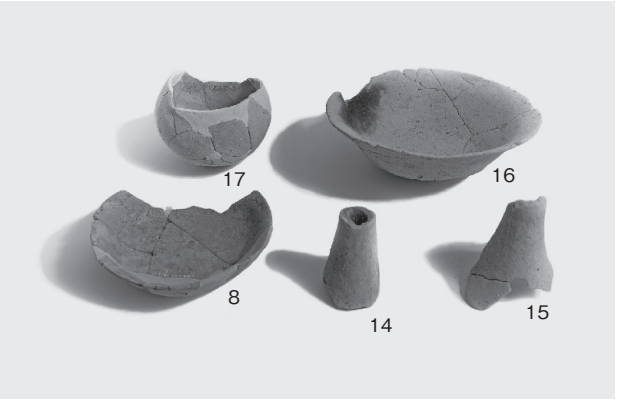


図 45　出土遺物 2

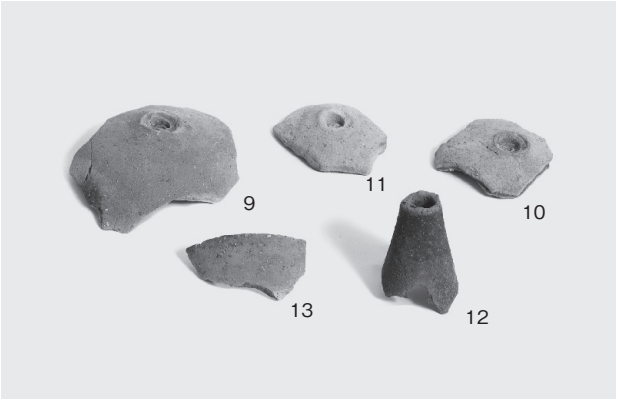


図 46　出土遺物 3

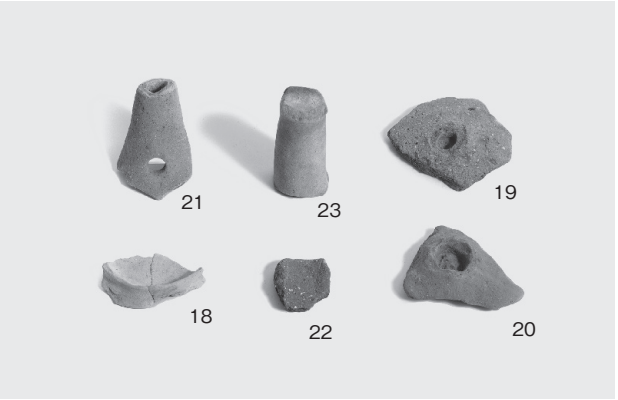


図 47　出土遺物 4

図 48　出土遺物 5

1～7：102 井戸上層
8：66 土坑
9～13：116 土坑
14：121 土坑
15：124 土坑
16・17：110 ピット
18：基本層序第 6 層
19～22：基本層序第 7 層
23：調査区一括

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほりいせき
書名	堀遺跡
副書名	松原市天美南5丁目地内における共同住宅建設工事に伴う堀遺跡Ｃ４−1−23 発掘調査報告書
シリーズ名	松原市文化財報告
シリーズ番号	第 12 冊
編著者名	樫木規秀（編）、宮田慈、佐々木正治
編集機関	松原市教育委員会
所在地	〒580−8501　大阪府松原市阿保1丁目1番1号　TEL 072−334−1550（代）
発行年月日	2022年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほりいせき 堀遺跡	まつばらし 松原市 あまみみなみ 天美南 ごちょうめ 5丁目	27217	19	34° 35′ 06″	135° 32′ 06″	2021.7.09 〜 2021.9.08	204㎡	共同住宅建設工事に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀遺跡	集落	古墳時代	井戸、土坑、溝	土師器、須恵器、石製品	
	集落	平安時代 〜 中世	掘立柱建物	土師器	

要約

古墳時代では、中期に帰属する井戸やピットなどを検出した。井戸・ピットからは土師器などの遺物がまとまって出土した。遺構・遺物の状況から、調査地は集落の縁辺部にあたるか、周辺に集落が存在すると考えられる。当該時期の遺構・遺物は、既往の調査では確認されておらず、本調査によって堀遺跡における最も古い時期の様相をうかがえる資料を得た。

平安時代〜中世では、平安時代前期以降の掘立柱建物2棟など集落の一部を検出した。

松原市文化財報告　第12冊

堀遺跡

松原市天美南５丁目地内における
共同住宅建設工事に伴う堀遺跡Ｃ４−1−23 発掘調査報告書

発行年月日　令和４年（2022）５月３１日

編集・発行　松原市教育委員会
〒580−8501　大阪府松原市阿保１丁目１番１号
電話 072−334−1550（代表）

印刷・製本　能登印刷株式会社
〒920−0855　石川県金沢市武蔵町７番10号